

(平成二四年一月一日) 掲載

瞽女(こぜ) 奉納の手水石と感謝の石碑

蔵 由美

昨春、印西市別所の金龍山地蔵寺へ行く機会がありました。「別所の獅子舞」で有名な地蔵寺は、JR木下駅と北総鉄道の印西牧の原駅の間の中ほど、古いムラのたたずまいの中にあり、仁王門奥に木造地蔵菩薩立像(県指定文化財)を祀る地蔵堂、右奥には熊野神社の社殿が並び建っています。

ここには、如意輪観音像の十九夜塔が二基、私がいま調査中の子安像塔も安政四年から五基あり、女人講が盛んであったことがしのべられます。さて、庚申塔などの石仏を見て仁王門を出るところで、手水舎の傍らの二基の新しい石碑が目を引きました。

「御寶前」と大きく記された手水石、その右側の「瞽女さん手水石の奉納ありがとう」というメッセージと旅姿の瞽女さんの絵が刻まれている石碑は、二〇〇〇年に個人(女性)により建立されたものでした。

左側の石碑も同年の建立で「瞽女奉納手水石・御寶前」と題して、手水石を奉納した瞽女についての解説と、手水石に刻まれ

た銘文が、わかりやすく記されています。そして覆い屋の中の古い手水石は、給排水も整備され使えるようになっていました。

印西市別所地蔵寺の手水石の銘文

(正面) 御寶前

(右面) 草深村 香取平左工門
発作村 越川 五平治

木下宿 吉岡七良左工門

常州鹿島 瞽女 ヒテ

布鎌押付 瞽女 キ牛

(左面) 布鎌惣村々 世話人 與兵衛

同 弥兵衛

同 六兵衛

龍腹寺村

宝田村

(裏面) 願以此功德 普及於一切

我等與衆生 皆共成佛道

享和三癸亥歲 仲秋吉日

当村願主 瞽女キヨ

若者中

新しい石碑の解説文によれば、この手水石は、享和三年(一八〇三)、別所村の瞽女キヨと若者中が願主となり、近隣村々の有力者の賛同を得て奉納されたものとのこと。瞽女とは、三味線を弾き、歌をうたって渡世する盲女のこと、一組三人くらいで



祝儀歌、門付歌などをうたって歩き、夜は宿で「よせ」を行い人々を楽しませたといえます。右側面の三人の名は、瞽女に手を差し伸べた村名主や河岸問屋で、自分の家を瞽女宿として提供したと思われる。

娯楽の少なかった農山村の村人に瞽女は歓迎されたようで、「この手水石は当時の農民娯楽の風習があったことを示唆する貴重な史料」と石碑は語っています。

この手水石については、榎本正三氏の『女たちと利根川水運』(一九九二年刊)に詳し

く載っていて、キヨは寛政七年の別所村の高反別明細帳にある「警女老人」であり、賛同者の警女の常州鹿島のヒテと布鎌押付のキヨも実在したことは間違いなく、別所のキヨを頂点として警女仲間を形成していたと、榎本氏は推測しています。

また、世話人筆頭の布鎌村與兵衛は栄町長門屋大久保家の先祖で、その証言から当家は警女宿で、当村出身のキヨとの関連もあつたと考えられるそうです。

江戸川区内名主屋敷を訪れた警女

私は近年、江戸川区の一之江名主屋敷を会場に行われる秋の夜の警女唄ライブに魅了されています。今も文化財として残された東葛西領一之江新田の名主屋敷には、膨大な古文書が伝えられ、その中には、この屋敷が警女の宿となつたことやその経費などが記されています。

この屋敷を舞台に警女唄を演じるのは若く美しい月岡祐紀子さんと、最後に残った越州高田の警女さんたちとの交流を縁に、警女唄の伝承・発掘に取り組んでいる邦楽家です。三年前初めてその唄声と三味の音に接し、特に祭文松阪という長い物語の演目には、中世的な世界に引き込まれていく力強い魅力を感じました。警女についての月岡さんのわかりやすい語りも好評で、か

つての旅する警女の姿や門付けの様子、そしてまさに村人を前にした「夜の座」の臨場感を味あわせてください。

江戸川区を訪れた警女についての報告は、内田定夫氏の『警女の記録』（一九八三年）があり、その後二〇〇七年にジェラルド・グロマー氏による全国の警女唄の史料を集大成した『警女と警女唄の研究』が発刊されました。ここには、江戸川区や下総の史料も網羅されていますが、どの史料も、来訪した警女の人数とその経費を記すだけで、江戸川区の名主屋敷を定期的に宿にした警女の名や出身地は不明です。

「葛西新川」に住む警女が存在

私は、かつてみた映像や絵のせいか、警女さんたちは遠く雪国の町で、親方と疑似の親子となつて集団で生活し、列になつて峠を越えて来訪する姿をイメージしていました。しかし、印西市別所の手水石の銘は、

関東の村や町には単独または少人数の警女がいて、自村はもとより、近隣の警女でネットワークを組み、徒歩よりも内海や河川の舟運を利用しての巡業が多かつたのではないかと、語っています。この視点でも、一度グロマー氏の史料集にあたってみると、『船橋市史』史料編所収の藤原新田の「御用留」の弘化四年に「十月廿四日 一、

警女式人泊り 葛西新川組」と、また嘉永七年にも「四月九日夜 一、こぜ三人 泊り 葛西組之由」とありました。「葛西新川組」の「新川」とは、江戸時代の初め、現江戸川区内を流れる船堀川の流路を直線化した運河で「行徳船」が就航、農産物のほか、成田参詣の客なども運ばれるようになって、その川岸には酒を売る店や料理屋が並び賑わつたといえます。ここにも警女がいたということですから、そう遠くない一之江新田の名主屋敷で座を開いたということもあつたのではないかと思います。

上州と武州では遠く雪国から山越えて来訪する警女が多かつたらしいですが、一方江戸湾岸や利根川沿いの村々では、船で行きかう近隣の警女や地元の警女の活動も多々あつたでしょう。印西市別所の手水石や、船橋市藤原新田の史料から、村や河岸のにぎわいの中に住み、地域の中でその芸を披露する警女の姿がイメージされます。

新しい「警女奉納手水石・御寶前」石碑には、歴史資料としてこの石造物を大事する温かい心、そして「警女さん手水石の奉納ありがとう」の石碑には、警女さんに注がれる優しいまなざしを感じました。

この碑を建立された別所の皆様にも、心から「感謝！」です。